



Title	懐徳堂の書学
Author(s)	岸田, 知子
Citation	懐徳. 1986, 55, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂の書学

岸 田 知 子

神田喜一郎博士は『懷徳』二十二号（昭和二十六年発行）の「懷徳堂の文芸」で、経術と文章とを並び尊んだことが懷徳堂の学問の特色であり、さらに、書道を重んじたことが当時の漢学塾としては注目すべきことであると述べておられる。そして、三宅石庵は書に工たくみにして頗る顔法に通じ、五井蘭洲・中井鶯庵、いずれも斯道に造詣深く、また、竹山が書をよくしたことは周知の事実で、その書学については、彼の著述によってうかがうことができる、と続けておられる。この稿では、竹山の著述、およびその他の懷徳堂資料から懷徳堂の書学の一斑を明らかにしてみたい。

竹山は、「我が党の書法は万年先生の書にはじまり、蘭洲・春楼二先生の相並あひないで起こるに至って、その伝よ穢

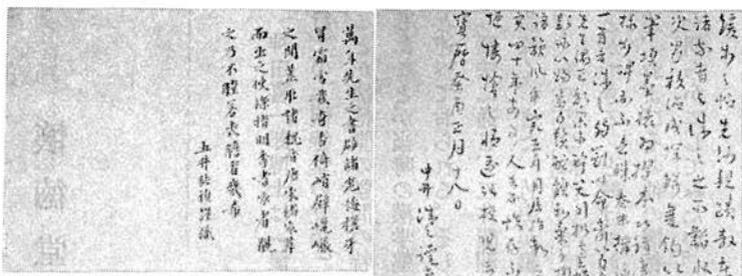
く広まる」（『奠陰集』卷八「書藤子常臨書東坡醉翁亭記後」と述べているように、万年先生、即ち三宅石庵を懷徳堂の学問上の祖であると同時に、書の上でも祖師とみなしていた。『奠陰集』には、石庵の書の題跋が多く見られ、石庵の書に対する竹山の評価がうかがえる。

先生書法の妙、雄渾奇拔、高く唐宋に攀よりて明季を睥睨す。其の一点一画みづか威いな人の意表に出づ。怒猊げい石を抉えり驚蛇草に入るの勢あり、孰たか能く跂及せん。十襲宝愛せざるべけんや。（卷八「書万年先生遺墨後」）

先生書法の妙、眞顔に攀より蘇黄に揖ゆう。世の明季諸家を戸祝しやくする者、実に企望を絶つ所なり。（卷八「書万年先生墨跡余白」）

いずれも、石庵を唐宋の書家に配して論ずべきものとし、明末の風とは一段違ちがうのだということを強調してい

三宅石庵「万年先生緩歩帖」と
五井蘭洲の識語



る。この論評は、五井蘭洲の石庵の書に対する次の評を受け継ぐものである。

万年先生の書は、これを辟うれば、老梅 槎牙として霜雪を冒し、奇香を発して峭壁巉巖の間に倚るがごとし。蓋しこれを魏晉唐宋諸家の萃より取りて、これを出し、明季書家に染指する者をしてこれを觀せしめば、乃ち瞠若して喪膽せざる者幾んど希ならん。（「万年先生緩歩帖」識語）

蘭洲も竹山も、当時の「明季の糟粕を嚼る」（書藤子常臨書東坡醉翁亭記後）ような風潮に対しては厳しい目を向けていることがわかる。

石庵の書についての一般的な評として『先哲叢談』の次

の文章をあげておこう。

石庵は書に工みにして頗る顔法を得。隻字も人争ってこれを求む。而して、資質朴素、その書する所、未だ嘗て款印せず。

今に残る石庵の書をみると、適勁で古拙の趣きがあり、確かに「老梅槎牙」とは言い得た評である。

石庵竹山は、に始まる懷徳堂の書風を受け継ぎ広めたのは蘭洲と石庵の子の春楼だというのが、その実、春楼の書については余り評価していない。「書法はその考万年先生に承け、家学を墜とさず。世以て米海岳父子に比ぶと云う」（『奠陰集』卷八「春楼書幅跋」）と述べているものの、賛辞は少なく、石庵に対する態度とは大きな違いがある。書評も前述の「書藤子常臨書東坡醉翁亭記後」中に見られるだけである。

余嘗て春楼先生臨する所の（蘇東坡醉翁亭記の）一本を觀るに、神逸の氣を籍り、手に信せて毫を下せば、自然に合作す。

確かに、春楼の楷書には整った筆力は見られるものの、石庵に比べて力不足であることはいなめない。

一方の蘭洲こそ、事実上の竹山の書の師であり、その後の懷徳堂の書風に直接的な影響を与えた人物といえよ

う。竹山は、蘭洲の書を次のように評している。

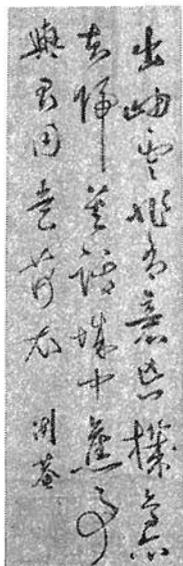
山谷嘗て曰く、翰林蘇子瞻、書法娟秀、墨の太だ豊かなるを用うると雖も、而も韵に余り有り。今に於いて天下第一為りと。先生、常に蘇子の筆意を愛す。斯の幅蓋し此に与かるの類なり。（『爰陰集』巻八「書蘭洲先生蕉飛魚躍四大字横披後」）

蘭洲先生書法遒勁、高く唐宋に攀る。その断簡残楮と雖も、人争ってこれを宝とす。（同「蘭洲先生書陶淵明掃園田居詩跋」）

蘇東坡の筆意を愛し、その書は「遒勁」と述べているが、現存する蘭洲の筆跡はいずれも骨格の堅固な、いわば瘦勁な書で、黄山谷の言う「墨の太だ豊かなる」とは趣きを異にする。

竹山自身は書をどのように学んできたのであろうか。

五井蘭洲「列庵先生双幅」の一



「貞蔵に答えて字学を論ず」（『竹山国字讀』）には「愚ハモトヨリ書才ナシ、又少キヨリソノ余事タルヲ知りテ意ヲ留メズ、タダ儒生相応ニ見苦シカラヌホドニト求メシノミ」とある。儒学者としての分別を明らかにした言であるが、「儒生相応ニ見苦シカラヌホドニ」なるには、やはり幼いころからの学習研鑽を必要としたことであらう。

竹山と履軒の兄弟は幼少のころ、冬には毎朝未明に起きて、一人は手桶を掲げ、一人は竹ほうきを担いで、淀屋橋に行き、手桶を硯に竹ほうきを筆になぞらえて、かわるがわる大字を練習したという話が中井天生の書いた『懷徳堂先哲遺事』に残っている。この話は竹山の外孫の並河寒泉が語ったものを中井天生が記録したものであるが、歐陽脩が幼い頃、荻の枝で地に字を書いて学んだという話を思い起こさせる。竹山兄弟の父、髡庵は懷徳堂創設期の学校預り人で、その後、第二代学主を務めたから、竹山たちは幼い頃から懷徳堂に学び、恐らくそこに住んでいた期間も長かったと思われる。懷徳堂のあった尼ヶ崎町一丁目（現在の大阪市東区今橋四丁目）は淀屋橋を渡ったすぐ南に位置している。事実か否かは別としても、こういう逸話の舞台として淀屋橋は格好のもの

といえよう。

「貞蔵に答えて字学を論ず」には「愚少歳蘭洲先生ノ書ヲ学ビタル時」とあるから、蘭洲に直接手ほどきを受けたことがわかる。当然、弟の履軒も蘭洲に学んだであろう。蘭洲が草書で唐詩を書いた折本が残っているが、表紙に「積徳蔵、延享五年」と書かれてあり、蘭洲がこの年十八歳の履軒に書き与えたものと思われる。また「蘭洲習字帖」というものも残っている。蘭洲は懷徳堂で経書ばかりでなく漢詩文をも講義したが、書を教えたということは記録にもないし、漢学塾としてなかつたとするのが自然であろう。が、特に年少の門弟には、こうして習字帖を書き与えていたことがうかがえるのである。

「貞蔵に答えて字学を論ず」にはさらに「愚少歳蘭洲先生ノ書ヲ学ビタル時一日先生命ジテ枝山ノ文賦帖ヲ臨セシム、時月ヲ積デ力ヲ得ルヲ覚ユ、ソノ後米南宮ヲ学ビ、又楮遂良ノ枯樹賦ヲ学ンデ益^{ます}力ヲ得タリ」と述べられていて、竹山が蘭洲の指導で祝允明（枝山）にであつた経緯がわかる。竹山が「祝枝山の書を学ぶ」と自ら表紙に題した折本が現存している。

「貞蔵に答えて字学を論ず」は次のように続く。
 字学ノ要ハ唐宋諸大家ヲ準的トスルニアリ、或ハ姑ク



中井竹山「祝枝山の書を学ぶ」の表紙（右）と内容の一部

明ノ大家ニ楷梯スルモ可ナリ、又悪^{いひ}ソ今人ニ求ルニ足ンヤ、近来文衡山ノ帖ヲ学バルルヨシ、随分宜シカルベシ、コレ当世ノハヤリモノニテ、勿論大家ナレド

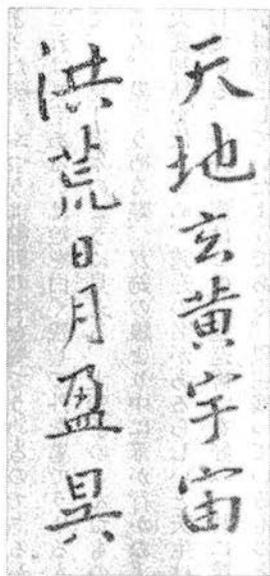
モ、コレヲ学ブ人往々卑弱ニ陥ル、トテモナラバ子昂
ヲ学ブベシ、又一等高秀ナリ、明ノ大家ニテハ祝枝山
ニシクハナカルベシ、文ト祝ト愚イヅレカソノ愈ルヲ
知ズ、然ルニ祝ハ学ビ得テ氣骨雄抜ナルヲ覺ユ、

文徵明（衡山）は当世のはやりもので、もちろん大家ではあるが、これより趙孟頫（子昂）が一等すぐれている、明では祝がすぐれ、これを学ぶと氣骨雄抜なるを覺えると述べる。江戸時代後半には、元明の書が流行し、趙孟頫・祝允明・文徵明・董其昌の法帖が多く刊行され、特に文徵明が流行したのであるが、竹山の言もそれを物語っている。履軒の草書は、祝允明の狂草を思わせると評されている。その書風の手引きをし、また大きな影響を与えたのは蘭洲であったといえよう。

竹山の子弟に対する書法教育はどうであったか。蘭洲は習字帖を残しているが、竹山もまた、年少者向けの習字手本を残している。竹山の著に『蒙養篇』がある。これは簡単な読本として読ませたもので、子として修養すべきことを書き、明治末年に活字に組まれて刊行されているが、原本は習字手本として書かれたものである。懐徳堂に学んだ升屋（山片家）の蔵書が現在、愛日文庫と

して大阪市の愛日小学校に伝わるが、この中にも、竹山直筆の『蒙養篇』が一本伝わっている。おそらく何本もかいて、弟子に与えたのであろう。このほかに、半紙に日常的な言葉を書いた手本も残っている。これは、中井家に伝えられたもので、自分の子供たちのために書いたものと思われる。身の回りの物の名前や、『春秋』等から取った言葉が書かれてあるが、干支や「岡村鈴木」というのもあって、ほほえましい。竹山の子の蕉園の書体が父によく似ているのも、こうした家庭教育のせいもある。中井家には履軒の仮名手本や蕉園の楷書・行書・草仮名の手本が伝えられたが、このような家庭内での習字手本が残っていることは極めて珍しいといえよう。もう少し年長の者に対しては、竹山はつぎのような学

習法を指導している。



中井蕉園行書手本

凡ソ古帖ヲ学ブハ必術アリ、響榻ひきうつしト臨摹みうつしノ二ツニアリ、(中略)サテ又初ヨリ一榻一臨シテ、時日ヲカサネ、十余帖ヲ成ベシ、(中略)サテ又他帖ニカヘテ又右ノ如クスベシ、ソノ他帖ハ衡山ニモアレ、子昂ニモアレ、又沂さかのぼりテ蘇、黄、米、蔡ノ帖、顔魯公、欧陽率更、柳公権ノ楷書ナド、別シテ宜シ、書体モ真行草トリマゼテ学ンデヨシ、(中略)タトヒ二王ヲ学ブトモ、ソノ一法ニ拘泥スベカラズ、タトヒ一大家ノ法ヲヨク覚ヘ、真ニ迫ルヤウニカキタルトテモソレノミニ止マリタラバ、欧陽公ノイワユル書奴ニテ、何ノヤクニ立ズ(「答貞藏論字学」)

ここに言うことは別段新しいことでもない。しかし、懷徳堂で「逡巡碑」がよく作られたことと、「響榻」と「臨摹」を重視することとは無関係ではないだろう。「逡巡碑」とは双鉤填墨の技法をいい、「ハヤイシズリ」ともいうと中井天生の『懷徳堂先賢遺事』にある。双鉤に

「逡巡竹碑」五井蘭洲画・中井履軒双鉤填墨



とつた後、ふつうは輪郭の中を墨でうめるのであるが、これは文字あるいは絵を白く残して外を墨でうめるもので、一見、墨本のように見える、大変手のこんだものである。墨でうめる際、双鉤の線より中に筆が行かぬよう大変神経を使うため、逡巡の名があるらしいと天生は記している。中井一族はこの「逡巡碑」を好み、特に履軒が得意としていたようである。現在残っているものとしては、石庵の書を履軒が双鉤填墨した「万年先生緩歩帖」「万年先生襄陽帖」、蘭洲が描いた竹の絵を履軒が双鉤填墨した「逡巡竹碑」また、履軒が書いた「解師伐袁」をその子の柚園が双鉤填墨したものなどがある。また、填墨はせずに双鉤だけ取ったものも見られ、履軒の場合は自らの書を双鉤している例もある。

懷徳堂では古筆名跡を上梓して頒布することがあった。例えば「道風書秋萩帖」は、大阪南部の清光院にある小野道風の書を三宅春楼が寛延三年に知友とともに双鉤にとり、これを上梓したものである。懷徳堂文庫のはか愛日文庫にもこの「道風書秋萩帖」が残っている。愛日文庫本には、天明五年(一七八五)の竹山の識語がついていて、竹山から直々、高弟の山片平右衛門に贈られ

たものと思われる。また同じく春楼の手になるものとして「道風書道澄寺鐘銘」があり、鶯庵と蘭洲の跋が付いている。蔡襄の「万安橋碑」を竹山が自ら刀を執り、それを拓本にしたものも残っている。このほか、懷徳堂の学主の書を板行したのも多く見られ、門弟たちに頒布していたことがうかがわれる。竹山に学んだ四国小松の藩儒が、懷徳堂から持ち帰った「朱子墨本」(懷徳堂蔵版)が、今、当地の公民館に掲げられているそうである。これらの製作は、名筆の顕彰と学問上の啓蒙の意味があったであろうが、書における啓蒙の役割も果たしたことと思われる。

履軒と書について、天生の『懷徳堂先哲遺事』に次のような逸話がある。懷徳堂と懇意であった京都の公家の高辻菅公が光格天皇から「朕は竹山の書は一幅持っているが履軒のはまだ持っていない。聞けば履軒は余り書を書かんそうじゃのう」と言われたというのが、履軒の耳

中井履軒「食毒詩幅」



懷徳堂の書字

に入り、「天子もさやうに仰せられたならば尚尚書きやせん」と言ったという。履軒は楚辭風の古い詩が好みで、そうした作品を残しているが、竹山に比べて詩の数は少なく、また、人のために書くことを好まなかったで、彼の書は多く流布しなかったと思われる。年始や節句の回礼用の「中井徳二」と書いた自筆の名刺は一枚七百度で好事家のあいだで交換されたということも『懷徳堂先哲遺事』にある。求められて書くのは好まなかったものの、元来は大変筆まめな人で、気が向くと、奉公人の請状の代筆をすることもあった(懷徳堂文庫「奉公人請状」)。薄墨を好んだこともその特徴である。

履軒は篆刻も多くしていて、印章のほとんどは自作している。懷徳堂の学主としての責任があった竹山と違い、履軒は自分自身の世界に没頭することができたから、本来の器用さを発揮した趣味的な書や絵、詩文、印章や陶芸品を作っている。

当時の儒学者は、学問の上で、朱子をはじめとする宋代の学者を尊崇するだけでなく、生活の上でも、宋以後の文人学者のあり方を規範にしようとしていた。懷徳堂の講堂のなげしの上には宋代の六人の学者の姿を描いた画像(「六君子図」)が掲げられていたが、それには、書

物を読み、囲碁を楽しみ、池の蓮を愛でる姿が描かれている。こうした生活を理想としていたのであろう。中井家に伝わる遺品の中には琴や笙もある。欧陽脩が六一居士と名乗った、その六つのものの一つに琴があったことを思い出させる。いわゆる明窓浄机なる書齋で、個人生活を楽しむ風が、とくに履軒に顕著である。彼は、書の研鑽を積むより双鉤填墨や篆刻、陶芸などの製作をより好んだようである。関心の強かった天文学に関する模型を作ったりするところも、学問上の実証主義的立場と同時、彼の趣好そのものを表わしている。

ついでながら、竹山・履軒以下天生にいたる中井家の

印章のほとんどが現存している。竹山の印の中には、篆刻家として文人として知られた高芙蓉（孺皮）や、混沌社同人の葛子琴、それに前川虚舟、曾之唯らの作が含まれていて、竹山の交友の広さや、当時の懷徳堂の文化的環境を垣間見ることが出来る。これらの非常に多くの印章が残っていることも大変珍しい。竹山・履軒の私印には動物、特に象のかたちをしたものがいくつもあって、その由来を調べてみるのもおもしろいかと思っている。

（この稿は昭和六十一年八月三日の書論研究会大会における発表に基づき、執筆したものである。）